

## 伊能忠敬と大入島

文化七年（一八一〇）旧曆三月四・五日

活躍した部下たちの働き

高盛 西郷

（会員 大入島石間浦）

### 【はじめに】

伊能忠敬の「測量日記」等の研究発表には既に他の会員も寄稿、私は第二一〇号、第二一四号、第二一五号で発表し共に話題になった。今回、私の住んでいる



伊能測量 200 年記念伊能忠敬像  
平成 13 年 10 月 建之 深川八幡宮

佐伯湾に浮かぶ大入島の測量について研究した。

第七次測量隊が九州測量を始め、文化七年（一八一〇）旧曆三月四日、佐伯領大入島に初めて来た。

隊長は伊能忠敬、幕府天文方の高橋至時よとよの手付（幕府の測量方の肩書き）。天文方下役坂部貞兵衛・下河辺政五郎・青木勝郎・永井要助の四人、内弟子として上田（植田）・築田栄蔵・箱田良助の三人。竿取りは平助と長蔵の二人、供侍四人。従者清七ら一八名が島に上陸した。

初日四日、大入島の測量は別隊として下役の坂部が陣頭指揮を取り、迎への船に乗り組み、島の中央の片神浦白浜に到着。ここから高松浦タテノ岬まで測量した。本隊の伊能隊長は本土側を測り、彦島を測量して島の高松浦に入った。夜間天体を測り、大休庵と脇宿百姓十兵衛方に宿泊した。

翌五日、伊能と坂部は庵に残り地図作成。部下達が測量した一点一点は素晴らしく現在図と比べ概ね一致、正確な測量は部下の働きである。県下に類を見ない伊能図である。今回研究の発端となり「測量日記」の実筆から活字に直し活動ぶりを【足跡】に纏めた。

文化七年（一八一〇）旧曆三月四日（新曆四月八日）

「測量日記」伊能忠敬実筆

後子付生浦坊  
三丁三三三之  
三丁三三三之

同日致々晴天  
先子六丁五丁後津井浦也  
後子五丁三丁上田

名田手仲津井浦下分種  
後海井浦校  
晴于浦在江浦字

風止浦波井波井傍之例  
一里廿丁四五丁  
先子取部下河色永井  
二丁四

去夜 丈入傍例  
名保浦字白波印  
日向浦浦字夫浦 二五浦

高松浦 唐船儀石  
字童ヶ島之例  
白波印分言九浦三丁一里二五丁三三丁  
高松浦七丁三三丁九丁三三丁三三丁

白波印  
一里廿丁三三丁三三丁  
先子九丁三三丁  
八丁丈入傍高松浦也

和保津字 浦家  
丈休傍 昭若百丁寸三三丁  
此夜晴天例  
丈入傍浦  
三三丁三三丁

日向浦五丁五丁  
森津浦吉吉  
日向浦六丁五丁  
行津浦陸津  
之保浦七三三丁三三丁

後津浦  
若網代浦  
三三丁三三丁  
三三丁三三丁  
比方海傍村  
先江左傍村  
右

村之先  
左傍村  
先江左傍村  
右

『同 四日朝より晴天 先手六ツ前〔午前五時半〕

後手六ツ後〔午前五時半〕 津井浦出立

後手 我ら・青木・上田・箱田・平助

津井浦下より初 浅海井浦枝波太 膝干浦 古江

浦字風無浦 浅井瀬井崎迄測 甲一里廿〇丁〇五間

(約六、一一八m) 同古江浦止宿迄 五十〇丁五十四間

二尺(約五五三三m) 後手 狩生浦枝彦嶋一周ヲ測

二十一丁四十六間一尺(約二、三七四m)

先手 坂部・下河邊・永井・築井・長蔵

大入嶋測 久保浦字白濱(印)より初 日向泊浦字

夷浦 二五浦 高松浦 唐船波石 字竜ヶ鼻迄測

白濱白印より高松浦止宿迄 一里二十〇丁二十三間

(約六一五〇m) 高松浦止宿前より竜ヶ岬迄九丁三十

四間三尺(約一、〇四四m) 合白濱 白印より竜ヶ岬

迄大入嶋九丁五十七間三尺(約七、一九五m)、内除

三十九間(約七一m)、先手八九ツ半〔午後一時半〕後

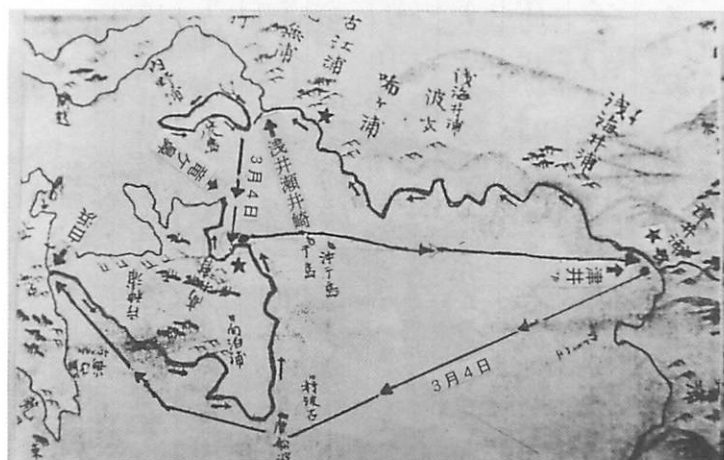
二後手八 八ツ前〔午後二時半〕大入嶋高松浦着 本陣

禅宗濟家 大休庵 脇宿百姓十兵衛 此夜晴天測量

大入嶋浦々庄屋出ル。

※読み替え 一、竜ヶ鼻、竜ヶ岬はタテノ鼻に

二、久保浦字白濱は片神浦に

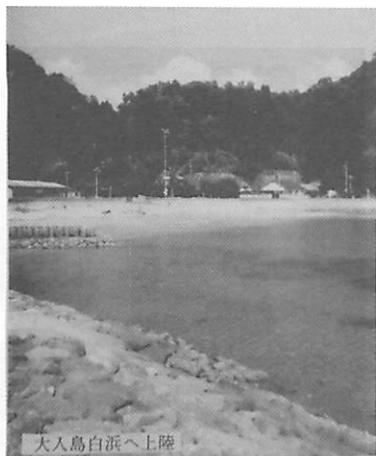


別隊(先手)片神浦枝白浜~高松浦竜ヶ浜(タテノ鼻)の測量

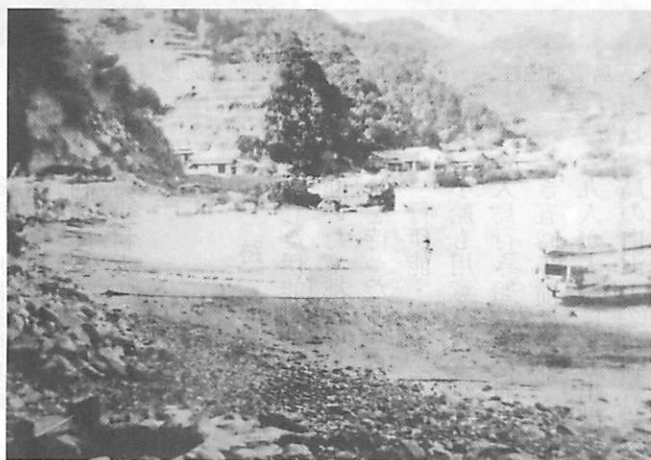
①大人島測量起点



片神浦字白浜

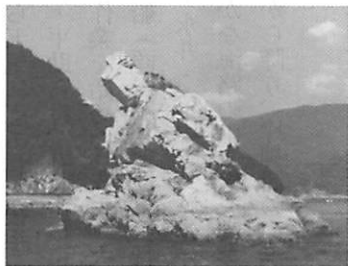


②日向泊浦字夷浦 (写真左下は神の井)



③高松浦人形はえ

(当時は唐船波石)

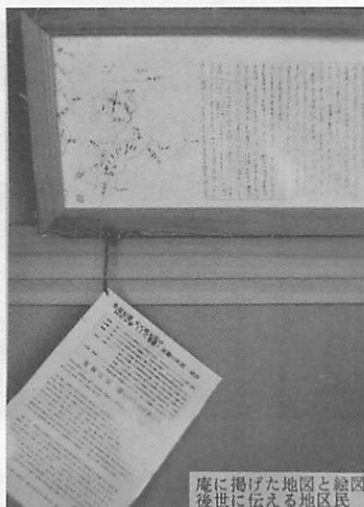


④高松浦 村波石





⑤伊能忠敬大入島宿泊地柱



⑥大休庵宿泊及び地図作成地 (現在の庵)

塩内浦与左衛門 森(守) 後浦吉兵衛 日向泊浦六右衛門 片神浦孫兵衛 久保浦七兵衛 石間浦儀兵衛 荒網代浦与兵衛 高松浦共八ヶ浦なり 地方ちかた 海崎村大庄屋江藤林左衛門 下野村大庄屋染矢孝右衛門 狩生村大庄屋彌左衛門 戸穴村大庄屋助右衛門 出る

〔足跡〕前日三日 高松浦庄屋平兵衛は津井浦に着した伊能忠敬に鳥八浦の庄屋に代わって、挨拶に向いた。地方ちかたの大庄屋も来ていた。船交渉も終わり明日を待った。三月四日 朝から天気恵まれ 後手 一行伊能・青木・上田・箱田・平助らは、五時半後に小船も用意されて津井浦から作業を始めた。先手 大入島行き船は高松浦庄屋が帆船(商い船)で迎えに行き五時半前に坂部・下河邊・永井・築田・長蔵ほか九人が大船に乗り出港。穏やかな海路の中、櫓を漕ぎ島の白浜①②に到着した。船から降り、片神浦の白浜に起点を定め測量にかかった。

島では日向泊浦の庄屋が小船数隻を用意していた。浜の砂場を通り越すと波打ち際は尖った岩場が多く、

また、崖の下を歩き、日向泊浦の夷浦（神武天皇が東征時立ち寄った所）の浜辺を経て二五浦へ広々とした遠浅の浜辺が続く。この先はまた岩場、ここが島の東

北端で右手に③唐船はえ（今は人形はえ）と④村波石が見える。さらに内海側に入り込み小石交じりの浜辺は一步一步測つて、高松浦止宿（しじゆく）に着く。この浦は岸辺

同 五日 卯暗天坐待（ま）以入洛高松浦（た） 如志（し）永井 築田 上田平竹 大入洛  
 久保浦 字白渡 ④卯分神行神浦 枝竹谷浦（た） 陸田浦 字横綱代（た）  
 荒綱代浦 上磨石 石間浦 糸（た） 名と名例 二里二十九丁 荒綱代浦 入在坊  
 片白洛 遠例 陸田浦 坊裏比理洛 糸（た） 荒綱代浦 坊唐洛（た）  
 石間浦 坊唐土洛（た） 下河造青木 糸（た） 田七尾 高松浦  
 字三渡分 神行神浦 糸（た） 久保浦 上 宇佐浦 竹（た） 坊を例 同三丁  
 三石間浦 糸（た） 名と名例 二里〇五丁 大入洛 坊 二里一十八丁  
 女子下八尾 古江浦 糸（た） 糸（た） 坂部 及人 年 坊 坊 止 上 相 和 冻 唐 屋  
 使 着 別 宿 百姓 三 夫 坊 日 午 後 坊 曇 天 小 雨  
 同 六 日 坊 夜 夕 大 雨 遠 而 伏 夕 雨

が深く海際を測りタテノ鼻で測り終える。

白浜起点から七、一二四m。午後二時半に止宿に着く。

本隊の伊能隊長一行は津井浦から陸地海岸線を測り彦島を測って同時刻に島の高松浦に到着した。島の八浦の庄屋と陸方大庄屋が挨拶に来ていた。夜は天体測量を行った。

〔同 五日 朝晴天先後手六ツ頃〔午前五時半〕

大入島高松浦出立

永井・築田・上田・平介

大入島久保浦字白浜 ㊦印より初 片神浦枝竹ヶ

谷浦人家十軒 塩内浦字横網代 人家二軒 荒網代

浦を歴て石間浦人家前にて手分けと合測 大ー里一

九丁一十七間一尺(約六、〇三二m) 荒網代浦 塩

内浦入会枝片白嶋遠測 凡周七丁計(約七六四m) 塩

内浦枝恵比須嶋小島なり 荒網代浦枝 唐嶋 凡四

丁(約四三二m) 遠測 石間浦枝 唐土嶋小嶋なり遠

測

下河邊・青木・箱田・長蔵

高松浦字立濱より初 片神浦本浦人家有 久保浦同



先手 高松浦タテノ鼻～久保浦經由石間浦までの測量  
後手 片神浦白浜～荒網代經由～石間浦までの測量

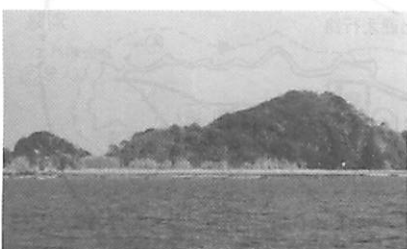
上守後浦竹ヶ嶋遠測 周三丁計(約三二七m) 過ぎて石間浦人家前にて手分けと合測大二里〇五丁五十三間四尺(約八四九七m)



⑨荒網代 唐嶋防波堤と繋ぐ(東島)



⑦守後浦竹ヶ嶋遠測周 327m (竹島)



⑩塩内浦 片白嶋 遠測凡周 764m  
1km 沖



⑧塩内浦 恵美須嶋(防波堤と繋ぐ)  
元 毛利家の生け簀跡



⑪荒網代 東島の一部・竹ヶ嶋  
約 5km 沖 (約 432m・灯台あり)



⑫石間浦玉角島又は唐土島  
昭和 30 年代陸地と繋ぐ、灯台あり

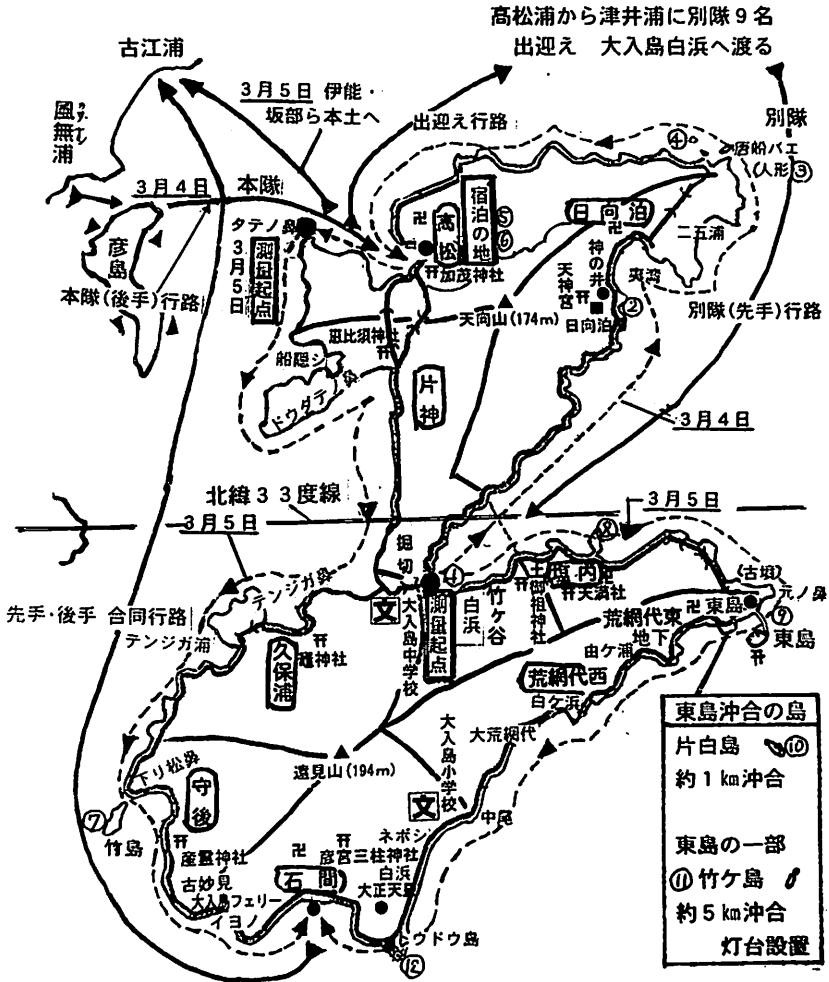
大入嶋共周、五里二十八丁廿九間二尺(約二一六五二  
m) 両手共八ツ後(午後二時半)古江浦工着 我ら・  
坂部・友人 午前高松浦ニテ地図 午後古江浦へ越  
止宿 本陣 庄屋儀兵衛 別宿百姓三右衛門 此日  
午後より 曇天小雨  
〔足跡〕

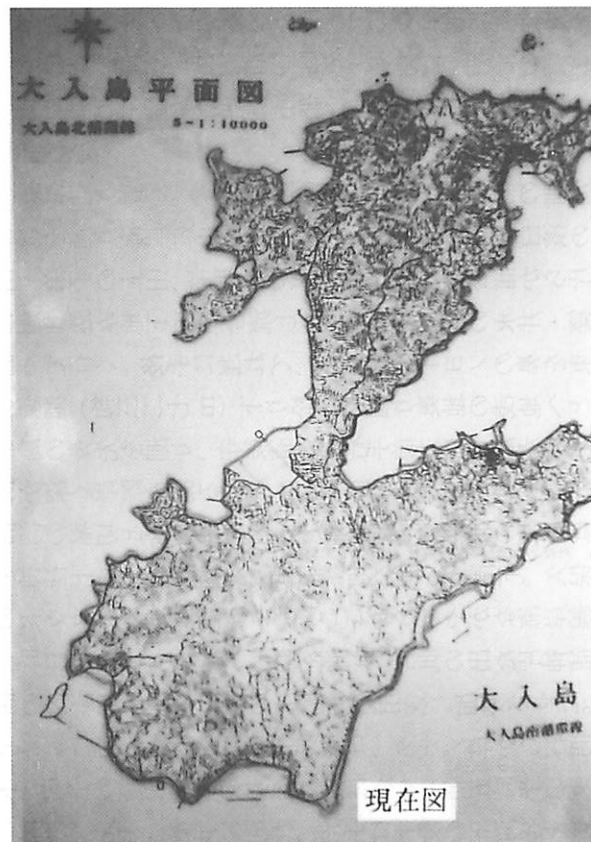
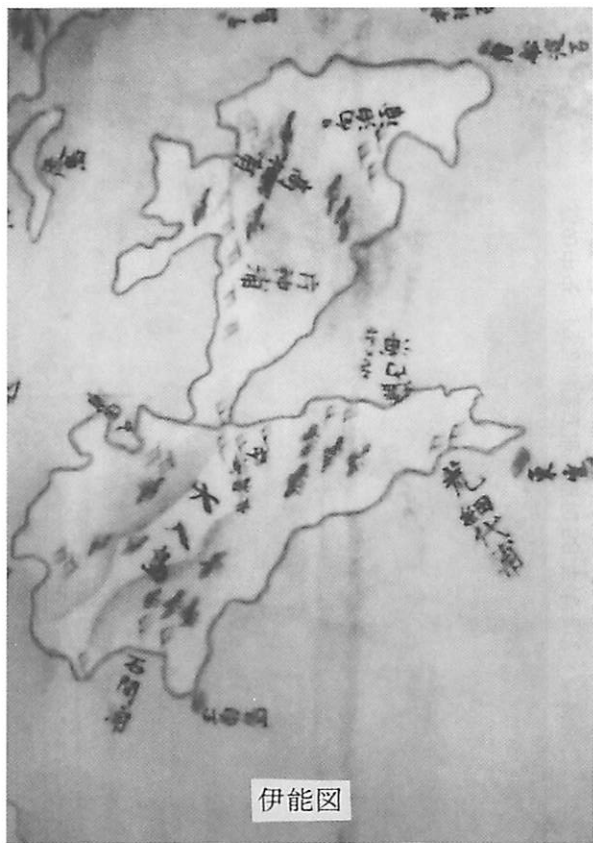
今日の測量には、伊能忠敬と坂部貞兵衛は前日の測  
量の地図作成で庵に居残っていたので、隊長、副隊長  
のいない測量隊になった。



# 大入島測量の足跡

文化七年（1810）旧3月4～5日







島の中央 内海側埋立地 昭和 58 年代完成  
南側から見た航空写真（中央部の→部分）

隊は、先手と後手に別れ、先手は下役の下河邊と青木、弟子の箱田と竿取りの長蔵ほかで、朝五時半頃タテノ鼻に向かった。庄屋平兵衛は、タテノ鼻から石間浦の内海側を測るため、小船数隻用意し加勢させた。

昨日のタテノ鼻から船隠を測り、岩肌の出た片神浦のドウタテの鼻へ廻りこむ。ここから穏やかな海岸線を神社下まで測り終え、更に窪地を測って南下。久保浦湾の堀切と陰の浦を廻って赤崎へ、久保浦の村中は海が深く岸際を測る。テンジカ浦の海際を廻り、先々、小島の鼻先を測り、守後浦へ。右手前方に竹島が浮かび遠測（約三二七m）下り松鼻を廻り奥地の浅地へと測って行く。後手に遅れて、石間浦のイヨノの鼻を東に廻り込み地下前で合流した。後手は下役の永井・築田・弟子の上田、竿取りの平助ら一行で高松浦から片神越を通り海岸に出て又、堀切を越え片神浦の白濱の起点に辿り着く。ここから石間浦までの外海側の測量を始めた。

塩内浦の庄屋左衛門は小船と加勢人を出し応援、竹ヶ谷の浜を測り、塩内浦の⑧恵美須島に。明治の頃まで毛利家の生け簀があった所、その後東側に防波堤を

出し陸続きになった。浦外れの東側の海辺は色艶のある岩盤が張り詰めていた。荒網代浦との浦境、元が鼻の北側付近は崖が高く小船の必要な所である。目前に⑨東島が見え島との間を通り抜け遠測(四三六m)。昭和十年以後、防波堤を出し陸続きになった。

凡そ一キロメートル沖に⑩片白嶋が横たわつており遠測(七六四m)。更に凡そ五キロメートル沖合に⑪竹ヶ島があり周四丁(約四三三m)高さは三三、六mに灯台がある。荒網代浦の浜辺は地下、由ヶ浦、白ヶ浜、大荒網代と続き、海際は所々砂浜だった。更に西に進み石間浦に入り、中尾なかおからメボシへと測る。約五〇m離れた⑫トウドウ島を遠測する。距離不詳)。現在は島唯一の灯台がある。昭和三十年代初め、砂利石が堆積して陸地になった。

先手はカガンバエを廻り湾内に入り込み、地下のマガラ浜で休憩。遅れて後手が湾内に入ってきた。合測して全測量を終えた。天候が小雨日和になってきた。

次の測量地古江浦に移動するため、石間浦の庄屋儀兵衛と高松庄屋平兵衛は高松浦と塩内浦に小船を返して大船を出し、古江浦に午後二時半後に着けて、

夫々島に帰った。

大入島全島の海岸線測量距離

片神浦白濱から高松浦タテノ鼻迄(別隊) 七二二四m  
 同所から石間浦迄 (先手) 六〇三一m  
 高松浦タテノ鼻から石間浦迄 (後手) 八四九七m  
 合計 二二六五二m

伊能忠敬の歩幅 一步は六九センチ

大入島全島の世帯数・人口(当時)

・荒網代浦 四五戸 三三二人  
 ・片神浦 三二戸 二四一人  
 ・石間浦 二四戸 一五〇人  
 ・高松浦 五六戸 三一五人  
 ・守後浦 一四戸 一〇一人  
 ・日向泊浦 四一戸 三一六人  
 ・久保浦 一三戸 九六人  
 ・塩内浦 三〇戸 三三八人  
 合計 二五五戸 一、八五二人

当時は島の北側と東側（豊後水道）に人が多く住み漁師の生活だった。明治三二年（一八九〇）に全国町村制が敷かれ、大入島村になった時、約三千九百人住んで居た。鶴岡、八幡と大入島は同じ位の人口だった。

大入島（堀切中央）の緯度は北緯三三度丁度。東経一三一度五五である。

伊能忠敬は「緯度一度」の距離を知りたかった。

緯度一度の距離	緯度一分の距離	地球の距離
伊能忠敬一〇・七 km	一八四五 m	三九八五二 km
現在北緯一一・二 km	一八五三 m	四〇〇五二 km
相違（約）	・五 km	八 m
		二〇〇 km

【あとがき】

寛政二二年（一八〇〇）閏年四月一九日（陽曆六月一日）伊能忠敬五五歳の時、江戸から北海道に向けて第一次全国測量の旅に出て一〇年目、第七次に九州に入り、旧曆三月四日（陽曆四月八日）六五歳の時大入島に来た。

測量隊一行一八名は、島に一泊、早朝から測量し二日間三場所をタビ草履ばき姿で、島中を歩き正確な測量をし、立派な地図を作り上げた。

後世にと「大入島しまつくりの会」は、測量二〇〇年記念として平成二十二年（二〇一〇）測量起点や宿泊地に記念柱をたて、改築した庵には地図と伊能忠敬実筆の「測量日記」写しを掲げ、後世に伝えている。御覧の通り、伊能図と現在図を比較すれば昭和五十八年埋め立てた土地を除けば、殆ど変わらない。

伊能と坂部不在の測量とは思えない島の海岸線を作り上げている。今回、島の岬や鼻にある小島など『遠測』したもの、以後、陸地に繋がったもの等、関係した島の写真を多く取り込んだ。伊能忠敬は「大日本沿海輿地全図」を手掛け始めた文政元年（一八一八）年七三歳で他界した。

測量隊一行が大入島の海岸線を辿った二一・六 km の内、大入島一周の道づくりが始まって三七年かけ、昭和六二年（一九八七）に、凡そ、一七 km の県道が海岸に出来面影を残す処は五 km です。【足跡】は伊能忠敬「測量日記」を身近に感じ思いを寄せたものです。



大入島絵図（慶長一〇年頃）一六〇六年  
 「大久保ノ嶋」大分県指定文化財



久保浦絵図（「佐伯の歴史と先哲」より）

大入島の久保浦の庄屋をつとめた安藤家には、ちょうど、その当時の久保浦の絵図が残されていました。